

### ◯ ラオスからの報告

### 3年ぶりに本邦研修を実施! ~日本人の健康の秘訣と食用昆虫の流通を学ぶ~

### ISAPHラオス 石塚 貴章



2023年1月末から約1週間、ISAPHラオス事務所のカウンターパートであるカムアン県保健局ソムチット副局長とサイブートン郡保健局プーソーン局長に本邦研修(福岡県及び愛知県)を実施しました。新型コロナウイルスの影響で停止しており、約3年ぶりの実施になります。今回の本邦研修の主な内容は「日本の医療環境および母子保健の変遷と住民の意識」と「日本国内での食用昆虫の消費・流通状況の視察」です。

#### 日本の医療環境および母子保健の変遷と住民の意識

聖マリア学院大学の浅野先生から、戦前から現在に 至るまで、日本の母子保健政策の関連指標の推移をグ ラフとともに講義していただきました。また、聖マリ ア病院では国際事業部の足立先生と山本氏から聖マリ ア病院を事例に、日本の医療機関の発展と地域での役 割の変化を説明していただきました。ソムチット氏は、 5歳児未満の死亡率と妊産婦死亡率や聖マリア病院外 観の写真を見て、1950年代の日本と現在のラオスが 非常に似ていることに驚かれていました。母子手帳の 開始や新生児訪問指導の実施など、各保健指標を日本 ではどのように改善し現在に至っていったのかを学び ました。また、これらの取り組みは、日本政府によるトッ プダウンの取り組みではなく、戦前より民間レベルで 健康相談所や訪問看護活動などがなされており、これ ら住民の自助努力の成果が制度化の参考になっている ことを伝えました。

名古屋公衆医学研究所では、日本の健康診断制度の 説明を受けた後に、ソムチット・プーソーン両氏が健



屏水中学校での講義

康診断を実際に体験しました。言葉が分からずとも、健康診断を受けやすいホスピタリティの高さや、住民自ら足を運んで受診をする姿を直接見ることができました。ソムチット氏は、「ラオスでは、健康診断は主に病院で受けられるが、受けにくる人はほんのわずかである。病院は病気や怪我があったときに行くところという認識」と述べ、日本の健康意識の高さを実感したようです。研究所内の設備と同じものを備えた検診車を見学し、学校・会社等への健康診断の巡回実施を知り、子どもから大人まで途切れることなく健康が守られる取り組みを備えていることを知りました。

#### 日本国内での食用昆虫の消費・流通状況の視察

福岡県にて、昆虫食専門店bugoom(バグーム)と 昆虫食の自動販売機を視察しました。ラオスにおいて 昆虫食は一般的な食文化ですが、販売方法は市場での 生鮮品または屋台での調理済み(揚げ)が一般的であり、 保存加工されたものはほとんど見ることはありません。 そのため、bugoomの店頭や自動販売機でパッキング された常温保存の商品を見て、生鮮・惣菜以外の可能 性を把握しました。これらの原産地はタイやベトナム・ カンボジアなどで、ラオスの身近な国から輸入されて いることに、ラオスの昆虫の輸出可能性を現実的に考 えることができました。また、ソムチット氏の興味を 何より引いたのは、その価値の高さです。グラム単価 では、ラオスの100倍以上の価格であり、日本とラ オスの物価の違い以上に高価な値段で取引がなされて いることに驚いていました。ソムチット氏は、県保健 局で食品医薬品部門を長きにわたり担当してきました。 サイブートン郡の食用昆虫養殖世帯がラオス国内外へ 加工流通を検討する段階となった際には、県保健局の 検査・承認を得る必要があり、ソムチット氏の理解・ 協力は重要です。これまで、カムアン県では食用昆虫 加工品の前例の少なさから、県保健局からは消極的な 意見しか聞かれませんでした。しかし、日本国内で近 隣諸国産の食用昆虫が流通されていることを間近にみ



名古屋公衆医学研究所の検診車を見学

て、「ラオスの食用昆虫 も日本で売ることができ たら、住民の自立に繋が る」と積極的な意見を引 き出すことができました。

本邦研修以前は、「日本は発展しているからラオスとは違う」と全く異なる社会として捉えがちでした。しかし、約70年前の日本と現在のラオスが似ていること、戦前から住民レベルで健康意



久留米市役所にて森副市長を表敬訪問



昆虫食自動販売機で商品を購入

識の高いことから、今のラオスでも参考になる点が多いとの声が聞かれました。研修以前は、医療従事者からの目線のみだったものの、研修中からは「どのようにしたら住民の健康意識を高めることができるのか」と考えを巡らし始めていました。上記の視察先以外にも、久留米市役所と久留米市立屏水中学校を訪問しました。屏水中学校では、中学1年生を対象にラオスの

抱えている健康課題やそれに対する取り組みに関する 講義を通して、日本とラオスの文化交流も実施しまし た。福岡県から愛知県への移動中には新幹線の車窓よ り雪景色、名古屋市では水平線を見て、ラオスでは経 験できない自然の美しさにも感動し、実りある研修を 終えました。

### カウンターパートより

### カムアン県保健局 ソムチット氏

久留米市役所や聖マリア学院大学訪問時には、日本の住民の生活習慣や健康的な生活を暮らしていることを、名古屋公衆医学研究所では検診車が学校や地域に出向き、健康診断を行っていることを学びました。住民が健康に対して高い興味を示し、健康診断に協力的であることが大きな収穫でした。最後に、日本人はとても親切で一つひとつの仕事に対する意識が高く、尊重し合う関係性に感銘を受けました。

官民学の連携が機能し、柔軟に対応をしている点を私たちは学ばなければならない。日本の発展には心の強さ、美しさ、助け合いなどいくつかの教訓をみることができました。



### サイブートン郡保健局 プーソーン氏

聖マリア学院大学において、いままでの日本の医療、病院、サービスの発展をみることができました。 お弁当のなかには様々な食材が入っており、多様な食品からバランスの良い栄養素を摂取できる工夫がなされていることを知りました。名古屋公衆医学研究所では、健康診断の受診を通して、日本人の患者に対するホスピタリティの高さを体験することもできました。本邦研修を通して、日本人は自分たちの

健康を重要視し、「健康は自分で守る」という意識のもと、今日の繁栄に至っていることを知りました。



### 事務局からの報告

## 「現地の人々の目線」から 見つける課題解決策

ISAPH事務局 佐藤 優



#### 「魚を釣って渡すのではなく、魚の釣り方を教えよ」

国際協力に関わりがある方なら、一度は耳にしたことがある格言ではないでしょうか。この言葉がよく引用されるのは、人々が自ら課題を解決できるようになることが私たちの最大の目的であるというところにあります。ISAPHは緊急の状況でない限り、積極的に金銭や物資による支援をしないのはきっと皆さんもご存知でしょう。しかし、自立に至るプロジェクトを実施することは、その大切さを理解することほど簡単ではありません。私たちが提案する解決策と現地のニーズがマッチしていない場合、プロジェクトが終わればまた元の生活に戻るということにもなりかねません。現地の人々が「実は『魚を欲して』おらず、『肉が欲しい』と思っていた」場合には、プロジェクト終了後、支援した技術が使われなくなることもあります。

このことがISAPHの活動理念の一つ「住民を中心に考える」に繋がっています。例えば、「私たちは『魚釣りを教える』ことによって、現地の人々の暮らしを向上させる団体です」というように解決策を固定することもできます。しかしその場合、現地のニーズと合わない地域ではプロジェクトをしないことになりますから、取り残されている人々にますます支援が届かなくなるかもしれません。ですから私たちは、第一に「現地の人々の目線」に立って課題を見つめ、次に必要な支援が何かを考えるようにしています。もしかすると、これまで取り組んだことがない方法が必要になるかもしれませんし、ISAPHが持っていない専門的な知識



マラウイ:佐藤先生の調査の様子

が必要になるかもしれません。効率が落ちるかもしれませんが、誰も取り残さない世界の実現に向けて、私たちは妥協せず、現地の人々が自分の健康を守ることができ、そして自立に繋がる活動を続けています。

今日は「現地の人々の目線」をテーマに、私の最近のマラウイ・ラオス出張での取り組みをご紹介しましょう。ISAPHが大切にしていることが、一人でも多くの方に届くと嬉しいです。

ISAPHマラウイ事務所では、マラウイ全体が抱え ている「子どもの低身長」の課題に取り組んでいます。 低身長は、栄養バランスに富んだ食物を適切な量食べ ることで解決します。解決方法は明らかですが、それ を実現することが難しいのです。これまでの活動を通 じて、食物へのアクセスの難しさと利用方法が大きく 影響していることが分かりました。現地で流通してい る入手可能な食物の種類に限界がある、食物が伝統的 な利用方法に偏っているという問題がありました。そ こで私たちは、不足しがちな食物の「生産技術」と調 理実習による「新しいレシピ」の支援を通じて解決を 試み、子どもたちは今までよりも多くの種類の食物を 食べてくれるようになりました。しかし、それでもま だ半数以上の人々は、以前の食事を続けています。同 じ環境にいても変わる人もいれば、変わらない人もい る。いったい何が多様な食物を摂取する動機付けとな るのでしょうか。人々は、食物をどのように理解して いるのでしょうか。

この点を詳しく探るため、専門家の力を借りることにしました。人類学・公衆衛生学を専門とする長崎大学の佐藤美穂先生に相談して、共同での調査を承諾いただきました。人々にとって食物がどのように認知されているか、どのような価値観に基づいて子どもの食事や栄養が考えられているのか、マラウイ農村部の人々の「食」に対する理解をテーマとして調査が始まりました。これまで私たちが知っていることは表層的な部分であるとして、現地の人々の考えについてより深く、社会的・文化的な背景も考慮しながら紐解いていきます。



マラウイ:お母さんの考えを聞き出す



ラオス:昆虫養殖について聞き取り

これによって行動の背後にある人々の考えが理解できれば、現地の価値観に合わせてもっと効果的な活動を 考案できます。そうすれば、もっと多くの人の自立を 支援できる活動にバージョンアップできるでしょう。

ISAPHラオス事務所でも、同じ課題(子どもの低身長)に取り組んでいますが、マラウイと同じ活動ではありません。文化的に昆虫をよく食べるというラオスの人々の強みを生かし、食用昆虫の養殖に取り組んでいます。昆虫養殖の技術支援は世界的にも珍しく、前例が少ないため、活動に参画している人々から定期的にフィードバックを受けることは欠かせません。ニーズとの齟齬がないか、自立に繋がっているかを確かめています。

私が今回インタビューした家庭は3つ。2019年から活動に参加しているパイロット世帯の方々です。コナ禍で支援が滞った時期もありましたが、今でも養殖を続けていることから各世帯のモチベーションはもこれません。パイロット世帯から本音を聞き出せるように、受け取った回答にさらに質問を重ねて、あるせ、民虫養殖について聞き取りました。すると、ある世帯では、家の用事が忙しく養殖に時間を割けなくで養殖にいるとのこと。また、虫を嫌う家族がいるので発生するとのこと。また、いずれの世帯も「養殖を止める」のではなく、夫と家庭の役割を交代したり、家族の目につか

ないところに機材を保管したりすることで、活動を続けられるように工夫していました。さらに「入手が難しい資材については調達を手伝ってもらいたいけど、その他はもう自分たちで準備できる」と皆が口をそろえて答えました。私たちが念押しするまでもなく、一人ひとりが自立を意識していることに驚きました。本事業は2023年12月までですが、それまでに残された課題に取り組み、昆虫養殖が地域の生業の一つとして根付く未来が現実のものとして見えてきました。

「現地の人々の目線」に立つと、課題解決に必要な活動が農業だったり、調理実習だったり、昆虫養殖だったりします。経験値を転用することが難しいという点では、もっと効率的にやってみては?という意見もあるかもしれません。でも、これこそがISAPHスタイル。そこにいる人々を中心にした、私たちの国際協力です。「魚釣りを教える団体」のようなシンプルさはありませんが、その代わりに私たちについて理解していただけるように、これまで以上に情報をお届けしていきます。どうぞ、これからもISAPHを見守って、応援していただけましたら嬉しいです。



## 🦳 マラウイからの報告

### アフリカランチイベントを 開催しました

ISAPHマラウイ 浜中 咲子



2023年1月21日にISAPH東京事務所近くのイ ベントスペースにて、私がISAPHに入ってから初め てのオフラインイベントを開催しました。本イベント は、マラウイの食べ物を通して、マラウイのことや ISAPHの活動を知ってもらいたいという思いをこめ て計画をしました。嬉しいことに、14名の方が参加 をしてくださいました!

本イベントでは、スペシャルゲストとして元インター ンの溝下遼太郎さんとバリスタの浜咲秋子さんに登場 していただきました。また、サポーターとしてインター ンの根田あかりさんにも急遽参加してもらいました。

イベントでは、一番初めにマラウイに渡航経験のあ る溝下さんと2人でマラウイの文化について衣食住を テーマに話をし、特に溝下さんにはマラウイで食べた 食事について話をしてもらいました。このパートでは マラウイの紹介だけでなく、ISAPHマラウイ事務所 の活動についても少し紹介をしました。

その後、マラウイの食べ物の紹介として、マラウイ の主食であるシマと付け合わせの卵のトマト炒め、ソ ヤピース(大豆の代替肉)のトマト煮、キャベツのト マト煮を提供しました。シマは参加者の前で作り方を 紹介しながら、実際の調理風景を見てもらいました。 マラウイの家庭でも使われているシマ粉で作ったため、 本格的なシマを味わっていただけたのではないかと思 います。また、ソヤピースも12月にマラウイから帰 国した際に購入してきたものを使いました。日本では ベジタリアン用の食材として使われることがあります が、乾物で長期保管できるため、マラウイの農村部で

はよく食べられています。シマを食べる際には、現地 での食べ方と同様に、手でちぎり少し捏ねて食べる方 法を紹介しました。参加者の方々からは、「初めて食 べたけど、美味しかった」「初めての経験だった」「マ ラウイが懐かしい」などの声をいただきました。マラ ウイに住んで3年ほど経ちますが、今回のイベントの ために初めてシマづくりを学びました。先生は我が家 のウォッチマン(警備員)でした。マラウイでの練習 はもちろんですが、日本に帰国中も何度か自宅でシマ 作りの練習をしていたので、無事に美味しく作ること ができて安心しました。

食事が終わった後は、ISAPHの活動でもよく作ら れているアフリカンケーキとマラウイ産のコーヒーを 提供しました。バリスタの浜咲さんには家庭でもでき るドリップコーヒーの淹れ方をレクチャーしていただ きました。浜咲さんが今回提供したコーヒー豆の情報 やコーヒーのレシピ・淹れ方のカードを作ってきてく ださり、それを見ながらレクチャーを受けました。私 自身も学びが多かったです。(実際にマラウイに戻り、 コーヒーを淹れる際には、習った方法を試しています!)

最後に、コーヒーブレイクの間に各テーブルをまわ り参加者の方々と交流しました。ゲストを通じて参加 していただいた方、以前からISAPHを知っていただ いていた方、マラウイに行っていた方、これからマラ ウイや途上国へ行こうとしている方など、様々な背景 を持つ人たちが参加をしてくださいました。今回のイ ベントでは参加者同士の交流も活発で、違った分野の 人たちが一緒に座った場所で仲良く話している姿がと ても印象でした。

今後も料理を通して、マラウイやISAPHの活動を 知ってもらえる機会を作りたいと思います。



マの作り方を紹介



実際に食べてもらったシマとおかず

## ◯ ラオスからの報告

### 3年間のラオス派遣の総括および 東京事務所勤務開始のお知らせ

#### ISAPHラオス 安東 久雄



ISAPHに入職し3年が経過したタイミングで、これまで注力してきた母子保健サービス利用率向上事業の成果を総括します。

奸産婦健診、予防接種、成長モニタリング、健康教 育を村に届けるアウトリーチ活動支援を通して、4回 以上の妊婦健診率と施設分娩率が特に低いという課題 が明らかになりました。無料で利用可能なサービスが なぜ利用されていないのか調査を行ったところ、「安 産である限り自宅分娩でも大丈夫」という考え方や「自 宅分娩するようにと両親に言われた| 等の因子が関係 していることがわかりました。また、母子手帳の記録 から妊婦健診の受療回数が少ないこと/施設分娩率が 低いことと、母子手帳に記載されていた出産予定日と 実際の陣痛発来日との乖離が著しいことに相関がある ことがわかりました。すなわち助産師が誤って約5週 間遅く出産予定日を妊婦に指導していたため、妊婦は 健診を4回受療する前に陣痛を迎え、病院で出産する 準備が間に合わず自宅で出産していた可能性が示唆さ れました。

以上の知見を踏まえ、以下の3つの活動をしてきま

した。一つ目は村の中で健康行動のモデルとなる村落 保健委員会を対象に研修を行い、妊婦健診を4回受け ることや病院で出産することが当たり前となる機運を 作りました。二つ目は妊婦が正確な予定日を把握でき るように助産師に研修を行いました。三つ目は分娩場 所の意思決定に関わる家族と一緒にバースプランを立 案し、本人と家族から「病院で出産したい」という公 言を得るようにしました。

その結果として、施設分娩率が51.0%から75.0%まで向上しました。ラオス保健行政職員の熱心な活動と地域住民の自分たちの健康は自分たちで守るという価値観の醸成により、この成果につながったと思います。4月からは東京事務所に配属になりますが、今後も遠隔でラオスの母子保健事業に関わり、現行のMOU(了解覚書)の締めくくりと次期MOUの事業の拡大に尽力していきます。



第一子の誕生を喜ぶナボン村の家族たちと

### ラオスとマラウイ、こんなに違うの!? ~民族衣装~

ラオスの民族衣装と言えば、女性用の腰巻きスカートの「シン」や男性が特別なイベントで着用する「サロン」が有名ですが、今回はローカルスタッフの結婚式に参加した時の、新郎新婦が肩から腰に掛けているパービアンと呼ばれる衣装をご紹介します。織られた地域により様々なデザインがあり、素材は絹や綿が使われ、天然染

料で染められています。パービアンの紋様には、無病息災や縁結び、安産などの願いや思いが込められているそうです。



**マラウイ** マラウイの女性は、アフリカ各地で 生産された布でドレスを仕立てたり、

腰に巻いたりとてもカラフルです。また、彼女たちにとっては髪型も服装の一部。商店でウィッグ(エクステ)を買い、定期的に複数の髪型を使い分けます。一方、男性には民族衣装を着る習慣がほとんど残っておらず、村長のような有力者は、暑い日もスー

ツやジャケット という出で立ち。 部族によっては、 幼少期からピア スなどアクセサ リーも身に付け ます。



#### 最近のできごと 2022年10月~2023年1月

10月2日 第6回日本国際小児保健学会学術大会に参加 **10月17日~29日** 【マラウイ】ISAPH事務局の佐藤をマラウイに

派遣、長崎大学との調査を開始

11月19日・20日 第37回日本国際保健医療学会学術大会に参加

12月12日 山梨県立大学で講義を実施

第72回聖マリア医学会学術集会に参加

1月~2月 Chan Nyein Aung氏、

Korrakoth Keungsaneth氏をインターン

として受け入れ

**1月9日~30日** 【ラオス】ISAPH事務局の佐藤をラオスに派遣

1月24日 大分県立看護科学大学でオンライン講義を実施

お豆腐屋さんって、最近めっきり見かけなくなっ たと思いませんか? 子どものころ近所にあったお 豆腐屋さんも、いつの間にかなくなってしまい、今 ではスーパーで買うのが当たり前になってしまいま した。それでも十分に美味しいと思っていたのですが、 見つけてしまったんです。ISAPH東京事務所の近くに、 お豆腐屋さんがあるのを。知らなければ素通りして しまいそうなビルの谷間に、ひっそりとそのお豆腐 屋さんは佇んでいました。

絹ごし豆腐一丁200円。スーパーに比べると高価 ではあるものの、大豆の甘みを感じるとても美味し いお豆腐でした。新橋は再開発が進み新しいビルが

どんどん建設されていますが、こういう 魅力的な個人商店も生き残っていってほ しいと、切に願います。



### 入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも 多くのご入会・ご寄付をお待ちしております。

#### 寄付

### 賛助会員

いつでも、いくらからでも 法人 年会費:30,000円 お受けいたします。

個人 年会費: 3,000円

※ご入会の方にはニュースレターをお送りします。 また、オンラインサロンに参加することができます。

#### 【お支払い方法】

●クレジットカード でのお支払い

Syncable



●郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH 口座番号 00180-6-279925

#### ── 特定非営利活動法人ISAPH ─

#### 【福岡事務所】

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422番地 聖マリア病院 国際事業部内 TEL.092-621-8611

#### 【東京事務所】

〒105-0004 東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階 TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165 E-mail jimukyoku@isaph.jp URL https://isaph.jp/

#### ISAPHの役員名簿

役	職	氏	名	備考
理事	長	小早川	隆敏	東京女子医科大学 名誉教授
理	事	浦部	大策	聖マリア病院国際事業部 部長
理	事	江藤	秀顕	神山復生病院 病院長
理	事	渡部	和男	元特命全権大使
監	事	竹之下	義弘	東京六本木法律特許事務所 弁護士

【ISAPHニュースレター 第44号 編集スタッフ】 佐藤 優/石原 潤子

#### 社会医療法人 雪の聖母会



# 聖マリア病院

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- ●厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- ●地域医療支援病院
- ●福岡県救命救急センター
- ■福岡県総合周産期母子医療センター
- •福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院

- ●福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- ●福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- ●福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設

理事長: 井手 義雄 病院長:谷口 雅彦

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町 422 TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115 URL http://www.st-mary-med.or.jp

- 自動車事故対策機構 NASVA 療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設 (一般病院 2 〈 3 rdG : Ver. 1. 1 〉)
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病 (後) 児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。